

## ヨハネ 2 章 13～22 節「主への思いのきよめ」

私たちはどのようなことを求めて礼拝に出席するでしょうか。求道中の方々が救いを求めてまことの神の御前に出ることは幸いなことです。救われた私たちが礼拝において神からの祝福を求めることも間違いではないでしょう。けれども、罪深い私たちが礼拝に臨む時に、神を礼拝するという信仰による行いに際してさえも、悪魔は誘惑し、神の喜ばれることから私たちを少しずつ外れさせようとしてくることがあります。

### 1. 宮きよめ（：13～17）

主イエスは他のユダヤ人たちと同じように、過越の祭りや他の祭りの時にエルサレムに上られました。律法の定めに従って、当時のユダヤ人たちはユダヤ、ガリラヤ、また散らされていた地中海世界の各地から祭りのためにエルサレムにやって来ました。各地から来る礼拝者たちの便宜を図るために、神殿の庭には、いけにえのための動物を売り、両替をする商人たちがいました。礼拝者たちのためでしたが、その商売で儲ける者たちがいました。そして、そのことを宗教指導者たちも許可して、その商人たちから利益を得ていました。また、商売人や両替人は宮の異邦人の庭で商売をしていました。祭りの時には多くの人々がやって来ますからごった返していたでしょう。その騒がしさと異邦人の改宗者たちの礼拝が妨げられていました。

主イエスはそのような状況をご覧になり、怒られました。14～16 節。こんなに激しい行動をとった主イエスの姿は、宮きよめの時の他にはありません。「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」と、神への礼拝の場を利用して、自分たちの利益を得ていることに対して怒られたのです。

主イエスは神殿のことを「わたしの父の家」と言います。宗教指導者たちは怒ったことでしょう。しかし、イエスのご自分が神を父と呼ぶことのできる神の御子であることをはっきりと主張されました。

主イエスは「わたしの父の家」である神殿を「商売の家にしてはならない」と言われます。商売人たちに対して、またその商売を宮の中で行うことを許している指導者たちに対して、怒りを表し、挑戦しました。

弟子たちは「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」という詩篇 69 篇 9 節のみことばを思い起こしたとあります。宮をきよめようとし、神への礼拝をきよめようとした主イエスの熱心が、死に向かう一つの要因であったということです。このことにより指導者たちが反撃を始めることになったのです。

### 2. 死とよみがえりの予告（：18～22）

当然のことながら、主イエスの行動に対して人々は怒り、イエスに詰め寄ります。「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか」。つまり、こんなことをしたら、人々が神殿で礼拝することが困難になる。それに代わることを示せるのか。神の宮でこのような行動をするからには、神から権威を委ねられているというのだろう。そのしるしを見せてみよ、ということです。

それに対するイエスの答えは衝撃的です。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」。人々には全くあり得ないことを言っているとしか思えません。「この神殿は建てるのに 46 年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか」と言ってイエスを嘲りました。

ヘロデが工事を始めてから 46 年経ってもなお続けられていました。その工事は、ヘロデの主への信仰の表れというより、彼がユダヤ人たちに取り入ろうとして、また自分の偉大さを示そうとして行ったことでした。

そのような神殿を利用する思い、礼拝を利用する思いがヘロデに、また宗教指導者たちに、商売人たちに、それぞれにありました。あるいは、祭りにやって来るユダヤ人たちにもあったかもしれません。わざわざエルサレムに行って、祭りを守り、神を礼拝するのだから、神の祝福を受けられるはずという思いです。そのような思いは壊されるべきなのです。

そして、主イエスは壊すものに代えて、「三日でそれをよみがえらせる」と言われます。21～22 節。主イエスはすでにご自分が進もうとしている道を知っておられました。ご自分の父である神のみこころに従う道です。

この時、弟子たちは主イエスの言動とその真意を理解することはできなかったのですが、後に、イエスが十字架で死なれ、三日目によみがえられたとき、この時のイエスのことばを思い起こしたということです。そして、この時の主イエスの言動と主の死とよみがえりに示されている真理を知り、信じたということです。

その真理とは、主イエスの十字架とよみがえりによって、人は罪を赦していただき、神の御前に出て礼拝を献げることができるようになるということです。旧約聖書で教えられていた聖所やささげ物はもう必要なくなります。それらに代わって主イエスはご自分のからだを犠牲として献げました。そのイエスによる犠牲が完全な贖いとして神に受け入れられたことは、イエスが三日目によみがえられたことで明らかにされました。このイエスこそ救い主、キリストであることを信じる者は神を礼拝することができます。イエス・キリストによって人が神の御前に出ることができ、キリストにおいて神の栄光に満ちた臨在が明らかにされるのです。このように旧約時代の神殿とささげ物に代わる新しい礼拝をイエス・キリストが用意してくださったのです。

また、このときはイエスのことばの意味が分からなかった弟子たちが、主イエスが「死人の中からよみがえられたとき」には、主のことばを思い起こして、「聖書とイエスが言われたことばを信じた」ということです。

17 節に書かれているように、弟子たちが詩篇のみことばを思い起こしたことも、その出来事の最中でというより、22 節と同じように、主イエスの死とよみがえりのあとで思い起こして、詩篇の預言的なみことばの成就であったと理解したのでしょう。

そのようにみことばを聞いた時には分からないことがあっても、後に、イエス・キリストの十字架とよみがえりを信じて、みことばを悟り、信仰を深くされることがあるのです。

ですから、みことばを聞いた時にすぐには理解できない、信じられないことがあっても、みことばを聞き続けることが大事です。聖霊が働かれるなら、「聖書とイエスが言われたことばを信じ」ることができるようになるのです。

また、みことばを語る者、教える者はみことばを語り続け、教え続けるのです。親は子どもたちをみことばによって訓練し続けるのです。みことばの種を蒔き続けるなら、「ずっと後の日になって」芽を出すことでしょう。信仰と忍耐を持って蒔き続けることを教えられます。

今日の箇所では教えられることを、二つのことにまとめます。一つは、私たちは主イエスを通して神を礼拝することができるということです。

旧約時代には、幕屋や神殿に行って、いけにえの動物を献げて、神を礼拝することができました。動物の血によって罪を赦されて、神の御前に出ることができました。

しかし、旧約時代の神殿とささげ物は決して完全な救いを与えることはできませんでした。定められた場所に行き、定められたささげ物を毎回献げなければ罪の赦しはありませんでした。

その神殿での礼拝は壊される必要がありました。そして、旧約の礼拝が指し示していたまことの礼拝を、イエス・キリストを通して献げられるようになりました。イエス・キリストがご自身のからだを犠牲として献げ、その贖いによって、罪を赦していただき、神の御前に出て、礼拝を献げることができるようになりました。イエス・キリストを信じる者は誰でも、聖なる神との交わりを回復させていただけます。救いをいただきます。これは神の大きな恵みです。

この神の恵みを感謝して受け取っていただきたいのです。イエス・キリストを信じて、信仰を告白しましょう。また、すでに神の恵みを受け取っている私たちは、主の恵みがいかに大きいかを思い巡らして、感謝を新たにしましょう。

もう一つは、礼拝での態度、教会でのあり方を省みることです。礼拝では、神のみことばが語られ、神が特別に臨在されます。私たちは神の御前に出ている恐れと感謝を持って、礼拝を献げる必要があります。また、私たちが礼拝に集う時、自分が益を受けることが第一にならないようにすべきです。

もちろん、礼拝を通して、神は私たちに祝福を与えてくださいます。私たちはみことばによって教えられ、また主にある交わりを与えられ、そうして導きや確信や励ましを与えられ、喜びを与えられます。しかし、そのようなものを受けることが第一になってしまう、つまり自分自身が中心になってしまうなら、神は喜ばれません。そうではなく、神が中心であり、神が教え、求めておられる礼拝となることを、私たちは求めていく必要があります。神に仕えるために自らを献げ、神があがめられる礼拝によって、集う私たちに神の祝福が与えられるのです。その順番が逆にならないように、私たちは心しなければなりません。